問題提起：
倫理と経済の両立は可能か

加護野 忠男

甲南大学 特別客員教授

はじめに

今年の共通論題のテーマは「倫理と経済のバランス」です。具体的には，倫理と経済は両立できるものなのか，それを両立させるためには何が必要だろうかということについて，議論をしていきたいと思います。

共通論題のテーマはより詳しくまとめると以下の通りです。

> 経営の「健全さ（倫理）」と「活力（利益追求）」は，一般に相反するものと思われている。しかし傑出した企業家の多くは，その両方を実現することは可能だと説き，自らもそれを実現させた（といわれる）。例えば渋沢栄一，出光佐三，稲盛和夫はその代表格の重要な一角を占める。
>
> 彼らはどのように考えて健全さと活力の両立を可能だと言ったのだろうか。企業家としての彼らの事績はそれをどの程度裏付けているのだろうか。さらには，こうした考え方は日本特有のものなのか。国際的にはどう評価できるのか。
>
> 今回の共通論題ではこうした視点から基調講演と報告，パネルディスカッションを構成し，企業家による「健全で活力ある経営」のあり方について議論を深めたい。

ウェーバー対ゾンバルト

共通論題が提示する問いは，単に企業家や経営の問題だけではなくて，そもそも資本主義というのはどのようにして成立するのかということと深くかかわる問いでもあると思います。

マックス・ウェーバー（Max Weber）が非常におもしろいことを言っております。経済合理性ということだけでは絶対に資本主義は成立しない。経済合理性ということを考えれば，それ以前の中世にもそういうものは存在したし，資本主義以前の社会のほうがより経済的に合理的だったと言えるのかもしれない。それよりも資本主義を成立させたのは高い倫理観である。このようなことをウェーバーは言っております。

この辺，また後でふれますが，倫理観といいましても，お金のために働くということからは資本主義は出てこない。働くことがそもそも使命なのだ，こういうところから資本主義は出てくるのではないか，というのがウェーバーの考え方でございます。

このウェーバーをかなり批判しているのが，経済史のゾンバルト（Werner Sombart）という人物であります。彼は非常におもしろいことを言っておりまして，ウェーバーの言ったような倫理観というのも大切だけれども，それだけでは絶対に資本主義は成り立たない，資本主義を成り立たせるためには２つのものが要る。もう

1つは，企業精神と言われる，負けん気とか，競争意識とか，こういうものも実は要るのだということを言っています。

彼には『ユダヤ人と資本主義』というユニークな研究がありまして，彼はその中で，ニュルンベルクという街の例を挙げております。ニュルンベルクは，ユダヤ人が来るまでは，商人も職人もお互いにすみ分けというのを上手にやって，競争しないようにしていた。そこへユダヤ人が競争というものを持ち込んだために，みんな大いに迷惑をした。それで，みんなで寄ってたかってユダヤ人を追い出して平和な街を取り戻そうとしたのだけれども，取り戻せなかった。街の人々は，ニュルンベルクの街で買い物をするのをやめて，ユダヤ人が逃げていった街で買い物をするようになってしまった。このような例を示して，ゾンバルトはユダヤ人が持ち込んだ競争というものが資本主義を支えたと言っています。そして，彼は同時に，経済合理性を発揮するためには，自分自身の利益に照らし合わせて考えていくという自利ということも必要だし，そこから生み出される合理主義というのも必要なのだということを言っております。

企業を成り立たせる３つの精神

市民精神

・勤勉 従順 節度 克己心 利他 地道 愚直（社会や職場のルールや約束を守り、真剣に仕事に取り組もうとする勤勉さ、克己心ならびに従順さ）

企業精神

・情熱 創造的破壊 勝利 征服 志 極限追求 使命感 リスクや失敗を恐れない精神（何ものかを追い求め、さまざまな障害を克服しても志を成し遂げようとする精神。闘争心、志を実現しようとする強靱な意志）

営利精神

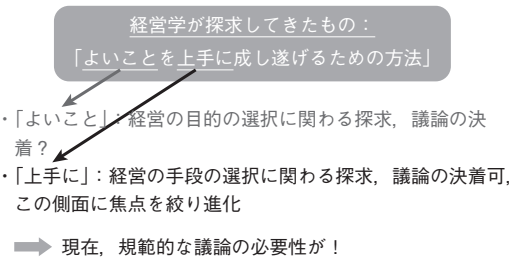
・合理性 数字へのこだわり 自利 本音（抽象的な利益にこだわり、そのために合理的判断を働かせようとする精神、自分自身の利益をもとに考えようとする自利の精神）

私の世代と同じ人々は聞いたことのある名前だと思いますが，東大全共闘の委員長で山本義隆という人がいて，彼は安田講堂で捕まった後東大をクビになりまして，その後予備校の先生をしながらいろいろ執筆活動を続けてこられました。彼がしばらく前に書いた本で『一六世紀文化革命』という本があります。学者の間では，17世紀に科学革命というのが起こって，ヨーロッパはアジアに勝ったのだというのが常識になっておりますが，山本義隆は，その前の16世紀，ルネッサンスの時代に非常に大事なことが起こっていると言います。それは，物事を数字で測るということが始まったということ。彼は言います。数量革命，計量革命，物を測る，職人たちは重さ，長さを測ればいいんだけれども，商人たちは利益というものを測り始めた。そして，これが西欧の近代合理主義のベースになる。数字で物事を考えるということは極めて合理的なことなのだということ，合理性というのを生み出しやすいんだと，このように言っております。しかし，いったん数字というものが出てきてしまいますと，それに押し流されてしまうということもあり得るわけでありまして，その中で，この数字の上での利益というものと，それから，そもそも企業がなすべきこと，企業がなしてはならないことというのはどのようにあるのかが問題となってきます。

「よいこと」と「上手にすること」

経営学の役割とは何かについて，私は，よいことを上手になし遂げるということを考えることだと考えています。これまで経営学は，この中で，よいことは何かということ，この議論を

経営学のこれまでの進歩とこれから



できるだけ避けようとしてきました。この議論はややこしいから答が出ない，しかし上手にするということに関しては科学的にある程度議論できるところがある，ということで，この上手にするということに経営学は重点を置いてきた。

しかし，時々，そもそもよいことって何なのだろうかということを議論しなければならないときがあって，今，実は世の中全体がそうだと思います。「コンプライアンス」というよくわからない言葉が語られ始めてから，日本の企業はだめになりました。不祥事もよく起こるようになりましたし，どちらが先か後かはよくわかりませんが，元気もなくなってしまいました。

私にも，これではだめだなと思ったことがあります。私は久しぶりに科学研究費＝科研費をもらったのです。その説明をするというので，大学の科研費の使い方の説明会に2時間出席しました。そこでは，今まで起こった不正の事例を事細かに説明されまして，こんなことはしないでください，不正をしないでくださいという話ばかりなんです。この2時間の間に一言も，いい研究をしてくださいという言葉はなかったんですね（笑声）。不正をしないことだけが大切なのなら，こんなのはもらわないほうがいいというふうに思ったのを覚えております。

何か結局，マイナスが起こらないようにするということばかり企業も気にしておりまして，会社の中でもそういうことばかりになってしまった。ホテルとかレストランは，産地偽装をしないようにと。しかし，ホテルとかレストランが，コックさんに言うべきことは，産地偽装するなということよりも，おいしい料理をつくれということなんだろうと思います。何かマイナスのことをなくそうなくそうとばかりに考えがいってしまっているというところもあると思います。今日は，利益というものと倫理というものをどう上手に両立させていくかを考えたい。倫理そのものの示し方ということに関しても問題があると思います。そういうことで各界の論客に集まっていただきました。

登壇者の紹介

基調講演としまして，京セラの元社長・会長で，会長を辞められた後，同志社大学大学院の博士課程で論文を書かれて，しばらく同志社大学の先生をされていたのですが，再びビジネスの世界へ入られつつある西口泰夫さんに今日は来ていただきました。パナソニックと富士通が一緒になって立ち上げるシステムLSIの会社の経営者（会長兼CEO）をお引き受けになったということでございます。その経緯なども含めて，京セラ時代のご経験をもとにお話を頂戴したいと思います。西口さんからは「企業経営の責任を果たすための経営論理と実践の融合」ということで基調講演をいただきます。

その後，最近では『海賊とよばれた男』という本で有名になりましたが，「出光佐三の合理性と人間理解」について一橋大学の坪山雄樹さんから，「渋沢栄一の道徳経済合一説」を一橋大学の田中一弘さんから，最後は「所有権の社会的責任と公益財団」というテーマです。ドイツでは，よい会社というのは非上場である会社が多いのです。世界中の自動車メーカーがディーゼル・エンジンをつくるたびにボッシュという会社にチャリンチャリンとお金が落ちていきます。今日はクルップとこのボッシュという2つの会社の例を挙げていただいて，両方とも公益財団の所有企業という形で非上場を貫いている，そういう会社の例を横浜国立大学名誉教授の吉森賢先生にお話ししていただきます。

それでは，最初に西口さんにお願いしますが，西口さんをご紹介しますと，さきほども言いましたように，京セラの社長を6年間されました。その間に，京セラという会社の収益率は目覚ましく改善されました。社長に就任されて，恐らく一番はっきりとした目標として設定されたのは，京セラという会社の収益率を，私がこの前に聞いた話では15%まで持っていくということであったと。それを目標に，どんどんどんどん収益の上がらない事業を切っていく，新規事

業を切っていく。そんなことをすることによって，大分，稲盛さんの逆鱗に触れたのではないかと私は勝手に想像しております。そういうことも含めて，収益というのを重視した経営をされてきたご経験をもとに，経済と倫理をどう両立させていくかということについてお話を頂戴したいと思います。

どうぞよろしくお願いします。

参考文献

山本義隆（2007）『一六世紀文化革命』みすず書房。

マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳）岩波文庫，1989年。

ウエルネル・ゾムバルト『ユダヤ人と資本主義』（長野敏一訳）国際日本協会，1943年。

Harmonization between Ethics and Economy: Is it Possible?

KAGONO Tadao

"Ethics" and "Vitality (profit)" of management are generally considered to be in conflict. However, many of the outstanding entrepreneurs have preached that it is possible to achieve both, and (it is said) they have realized it. For example Eiichi Shibusawa, Sazo Idemitsu, and Kazuo Inamori are proponents of these cornerstones.

One may wonder what they were thinking when it was noted the realizing both ethics and vitality was possible. To what extent does their performance as entrepreneurs support it? Furthermore, is such a concept unique to Japan? How can it be assessed internationally?

This article aims to answer these questions, consists of a panel discussion, and there is a desire to deepen the discussion by entrepreneurs about the role of "management that is healthy and has vitality."